

Ⅲ 研究の内容

1 アンケート調査の実施

プログラムの作成に当たり、本研究の対象となる道立特別支援学校にアンケートを依頼し実施した。

(1) アンケート調査の目的

プログラムを各学校で活用しやすいものにするため、指導に当たっている教諭の率直な意見、初任段階教員が研修や業務、自身の将来の見通しに対してどのようなことを感じているかなど、当事者が研修について感じていることを情報収集、整理分析し、プログラム作成の根拠を得るための基礎的資料とする。

(2) アンケート調査の実施期間

令和5年7月～8月

(3) 方法

質問紙をメールで送付し、選択式及び記述式にて回答を得た。

(4) 対象者と回答数

令和5年度にア又はイが在籍する道立特別支援学校

ア 初任段階教員（1年次）（以下、1年次教員）：75名

イ 初任段階教員（2年次）（以下、2年次教員）：75名

ウ 令和4年度に、初任段階教員（1年次）の指導に当たっていた教諭（以下、指導教諭）：46名

エ 初任段階教員研修を担当している部署：45校

(5) アンケートの構成

ア 1年次教員を対象に実施したアンケートの質問項目

設問1 回答者について①

- ・障がい種
- ・正規採用前の教員経験
- ・所属学部
- ・担当業務
- ・校務分掌

設問2 回答者の目指す教師像について

- ・1年後の自分の姿（こんなふうになりたい）をイメージしているか。
- ・5年後の自分の姿（こんなふうになりたい）をイメージしているか。
- ・目指す姿に向けて取り組むこと

設問3 学校計画研修について

- ・知識の習得に向けて重要なこと（選択式）
- ・技能の習得に向けて重要なこと（選択式）

設問4 回答者について②

- ・業務に生かすことのできる自身のよさ
- ・業務で難しいと感じていること
- ・指導教諭から教えてもらいたいこと

イ 2年次教員を対象に実施したアンケートの質問項目

設問1 回答者について①

- ・障がい種
- ・正規採用前の教員経験
- ・所属学部
- ・担当業務
- ・校務分掌

設問2 回答者の目指す教師像について

- ・1年後の自分の姿（こんなふうになりたい）をイメージしているか。
- ・5年後の自分の姿（こんなふうになりたい）をイメージしているか。
- ・目指す姿に向けて取り組むこと

設問3 学校計画研修（1年次）について

- ・知識の習得に向けて重要なこと（選択式）
- ・知識について、選んだ項目の内容の理解を十分に深めることができたか。（選択式）
- ・技能の習得に向けて重要なこと（選択式）
- ・技能について、選んだ項目の内容の理解を十分に深めることができたか。（選択式）
- ・初任段階教員研修（1年次）は、目的や見通しをもって取り組むことができたか。
- ・初任段階教員研修を通して、専門性は高まったと実感しているか。

設問4 回答者について②

- ・業務に生かすことのできる自身のよさ
- ・業務で難しいと感じていること
- ・初任段階教員研修（1年次）で大変であると感じたこと
- ・初任段階教員研修（1年次）で取り組んでよかったと感じたこと
- ・指導教諭から教えてもらいたいこと

ウ 指導教諭を対象に実施したアンケートの質問項目

設問1 回答者について①

- ・障がい種
- ・教員経験年数
- ・指導した初任段階教員の所属学部
- ・担当業務

設問2 学校計画研修（1年次）について

- ・知識の習得に向けて重要なこと（選択式）
- ・技能の習得に向けて重要なこと（選択式）
- ・自校の初任段階教員研修における課題
- ・初任段階教員研修を進めるに当たり、大変であると感じること
- ・初任段階教員に対して教えたいと思うこと

エ 初任段階教員研修を担当している部署を対象に実施したアンケートの質問項目

設問1 学校の状況

- ・障がい種
- ・1年次教員の在籍数

設問2 学校計画研修（1年次）について

- ・「学級経営」について、指導助言を行っている教職員
- ・「学級経営」について、行っている研修の形式
- ・「教科等指導」（研究授業）について、指導助言を行っている教職員
- ・「教科等指導」（研究授業）について、行っている研修の形式
- ・「生徒指導・進路指導」について、指導助言を行っている教職員
- ・「生徒指導・進路指導」について、行っている研修の形式

(6) アンケート調査の結果

アンケートの結果について、1年次教員と2年次教員の同じ項目については同時に述べる。

ア 回答者について①（1年次教員、2年次教員）

初任段階教員への設問1では、回答者の所属校の障がい種、正規採用前の教員経験、所属学部等について選択式で回答を求めた。

1年次教員と2年次教員で所属校の障がい種、所属学部、担当業務等に大きな差は見られなかった。また、学校規模や都市部・地域、障がい種等による違いも見られなかった。

「正規採用前の教員経験」について、新卒者の割合は、1年次教員は49.3%（37名）、2年次教員は41.3%（31名）で全体の約半数である。

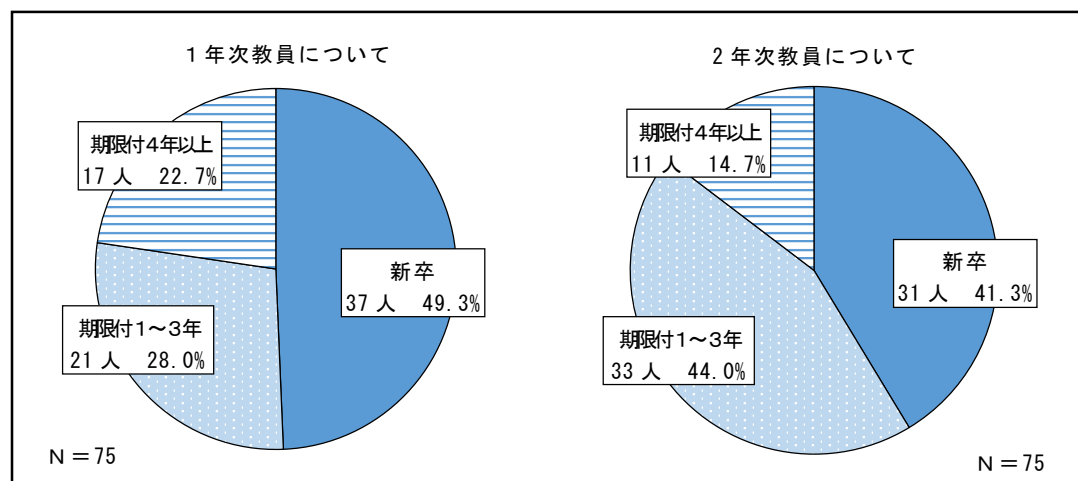


Figure 1 「正規採用前の教員経験（1年次教員、2年次教員）」

さらに、新卒のうち、学級担任を担当しているのは、1年次教員では21.6%（8名）、2年次教員では38.7%（12名）であった。

イ 回答者の目指す教師像について（1年次教員、2年次教員）

初任段階教員への設問2では、初任段階教員がどのような教師像を目指しているか把握するための回答を求めた。

「特別支援学校の教員として、1年後及び5年後の自分の姿をイメージしている」の設問に対し、「している」、「まあまあしている」、「あまりしていない」、「していない」の選択肢で回答を求めた。「している」、「まあまあしている」と回答したのは1年次教員が46.7%（35名）で、2年次教員は36.0%（27名）であった。

1年後の姿は「している」、「まあまあしている」に対して、5年後は「あまりしていない」、「していない」と回答したのは1年次教員が40.0%（30名）、2年次教員が36.0%（27名）であった。

また、Figure 2、3で示すのは、「特別支援学校の教員として、1年後及び5年後の自分の姿をイメージしている」の設問に対し、「している」、「まあまあしている」と回答した中から、1年後、5年後の目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていることについて、自由記述で回答を求め、キーワード化して抜き出し、記述内容の要旨について割合を算出して分析を行ったものである。

回答ではFigure 2、3で示すように、1年次教員は「研修する」が17人、2年次教員は「課題意識をもつ」が18人で最も多く挙げられた。

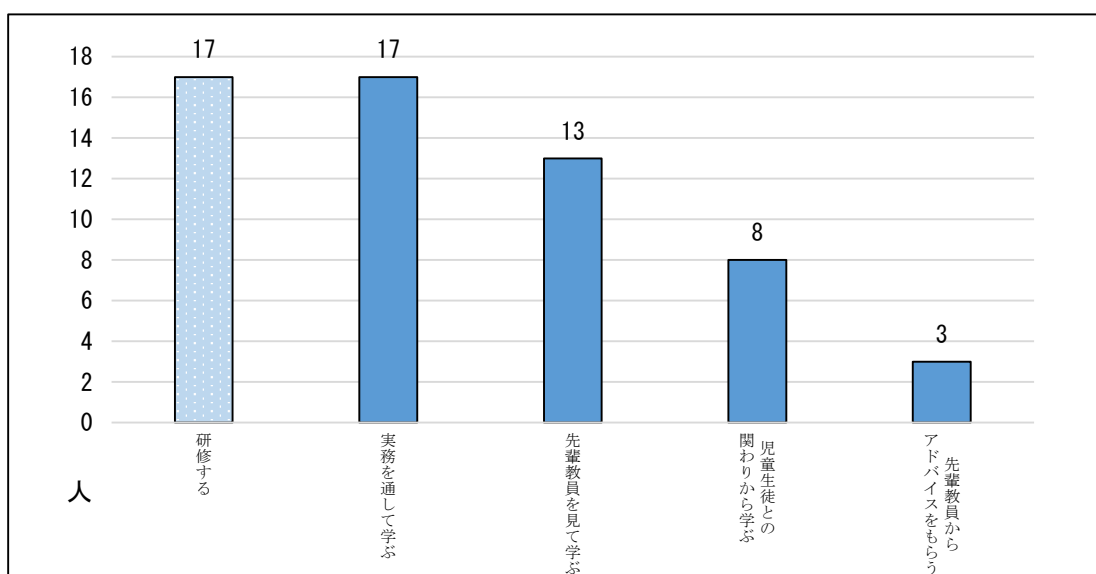


Figure 2 「特別支援学校教員として、目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていること（1年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

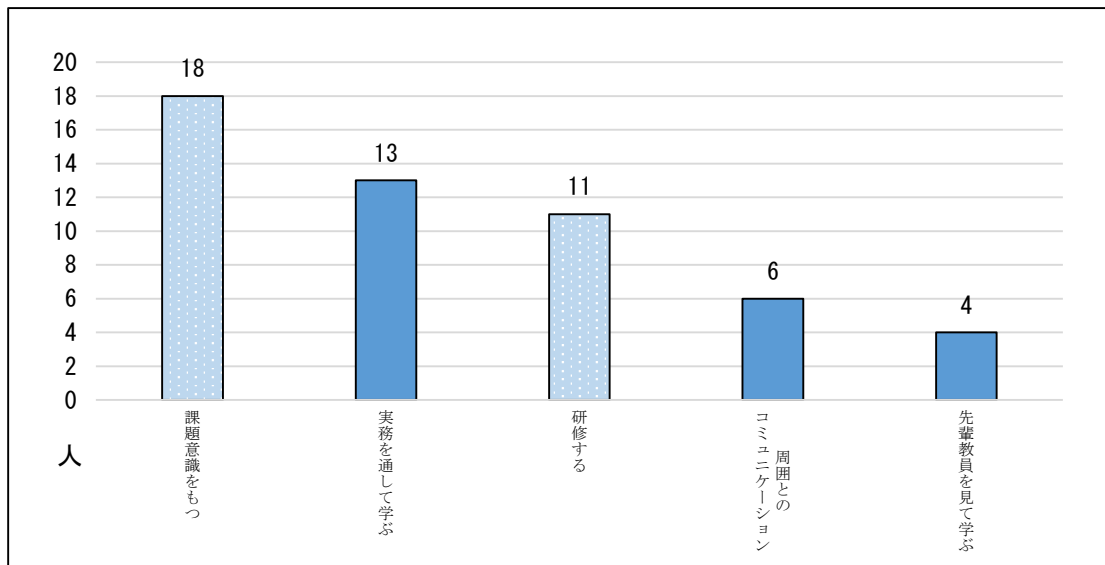


Figure 3 「特別支援学校教員として、目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていること（2年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

Figure 2、3からは、特に、「実務を通して学ぶ」、「先輩教員を見て学ぶ」、「先輩教員からアドバイスをもらう」、「周囲とのコミュニケーション」等、実際のやり取りや実務など直接的、実地的な関わりの中で学ぼうと考える意見が多く挙げられていることが分かる。

ウ 学校計画研修（1年次）について（1年次教員、2年次教員、指導教諭）

初任段階教員への設問3、指導教諭への設問2では、プログラムの内容の検討に向け、学校計画研修（1年次）において、知識、技能それぞれの習得に向けて重要であると考えることを複数選択（3つまで）で回答を求めた。選択肢は「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」の「初任段階教員研修（学校計画研修・特別支援学校）の主な内容」⁴から「学級経営」、「教科等指導」、「生徒指導・進路指導」の具体的な内容について提示した。

Figure 4は、1年次教員、2年次教員、指導教諭がそれぞれ、学校計画研修（1年次）において、身に付けることが特に重要と思う技能を「学級経営」「教科等指導」「生徒指導・進路指導」の項目ごとに割合にして示したものである。1年次教員、2年次教員、指導教諭いずれにおいても身に付けることが特に重要と思う技能について、「教科等指導」に関する内容を最も多く選択している。

⁴ （北海道教育委員会 2022. 3）「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」別紙

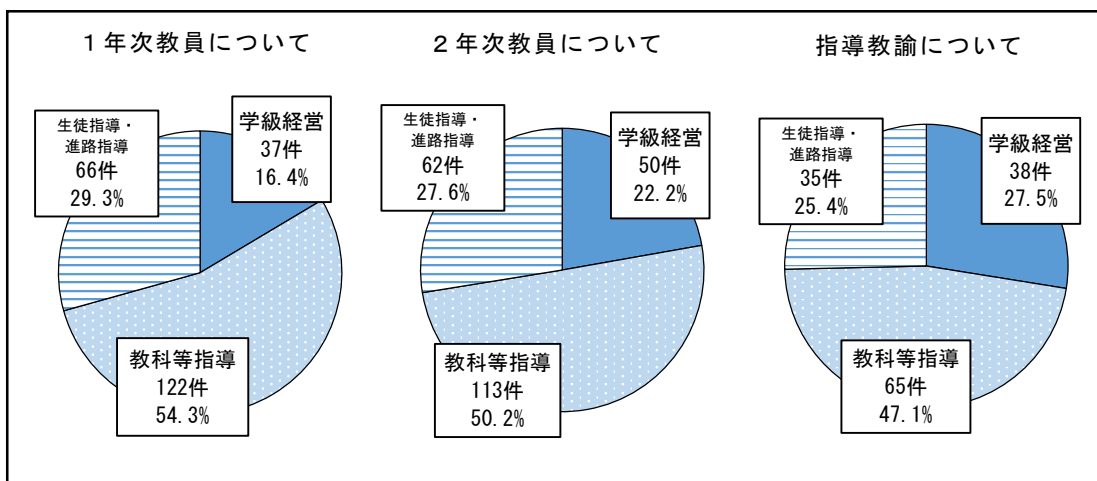


Figure 4 「身に付けることが特に重要と思う技能」

同様に、「身に付けることが特に重要と思う知識」について求めた回答においても「教科等指導」について最も多く選択された。このことから、初任段階教員、指導教諭ともに、研修では授業に関する能力を向上させ、学びを深めることが重要であると考えていることが分かる。

エ 回答者について②（1年次教員、2年次教員）

2年次教員への設問4では、昨年度の研修を振り返り、成果と課題を確認するための質問に回答を求めた。

Figure 5、6は、2年次教員が「学校計画研修（1年次）で大変であると感じたこと」、「学校計画研修（1年次）で取り組んでよかったこと」について、自由記述で求めた回答について、キーワードを抜き出したり記述内容を基に要旨をまとめて割合を算出したりするなどして分析したものである。

「特になし」の回答を除くと、最も大変であると感じたことは研究授業であり、最も取り組んでよかった、成果があったと感じたことも研究授業であった。

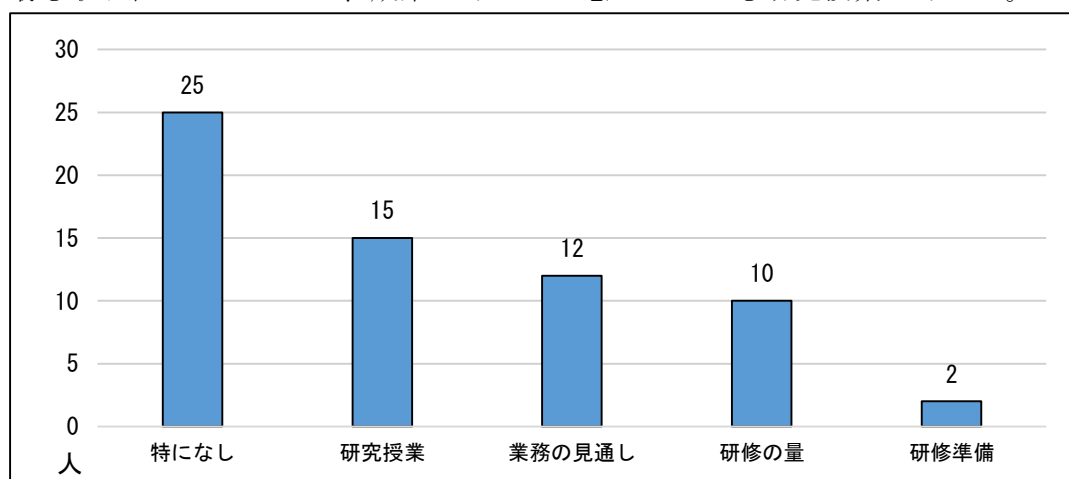


Figure 5 「学校計画研修（1年次）で大変であると感じたこと（2年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

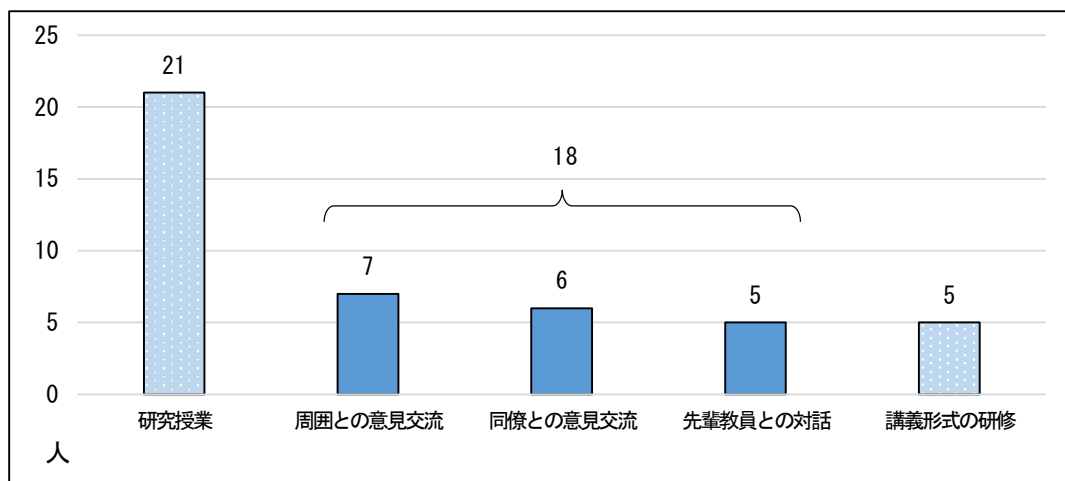


Figure 6 「学校計画研修（1年次）で取り組んでよかったこと（2年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

また、取り組んでよかったこととして、Figure 6 で示しているように同僚や先輩教員との意見交流や対話についても多く挙げられた。これらの3項目を合計すると、研究授業21名（29.6%）に次いで18名となり、全体の25.4%に上る。本調査項目においても、実際のやり取りや実務など直接的、実際的な関わりが学びについて効果があった、取り組んでよかったという回答を得ている。

オ 回答者について①（指導教諭）

指導教諭への設問1では、指導教諭は昨年度、初任段階教員研修の指導以外にどのような役割や業務を担っていたか選択式で回答を求めた。複数回答可としており、3つまで選択可能としている。

Figure 7、Table 1 では、指導教諭が校内で担当する役割や業務について、3つ兼務している割合は17.4%であり、その上で初任段階教員の指導教諭も担当している状況があることを示している。

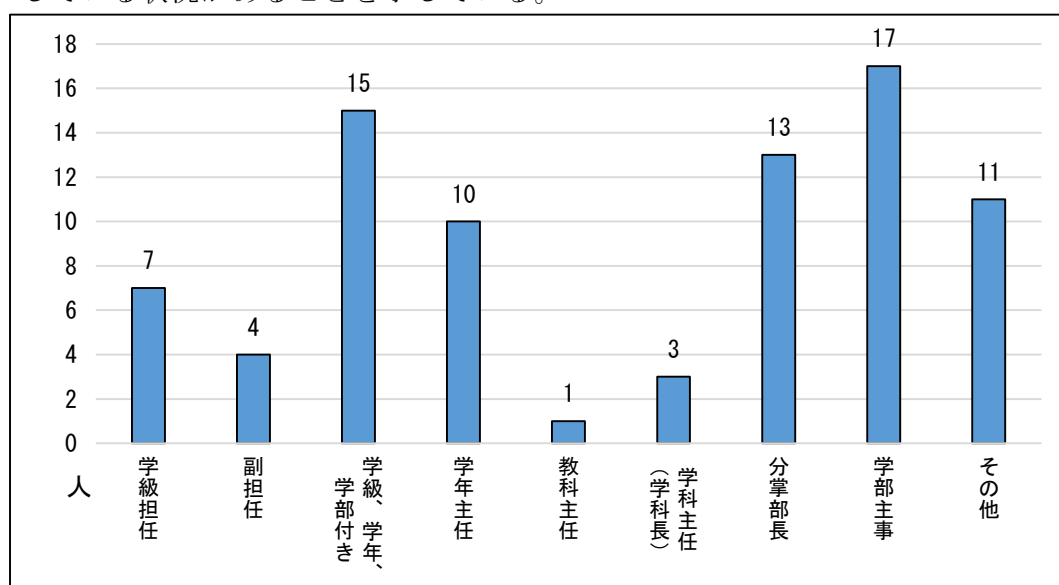


Figure 7 「昨年度担当した役割や業務（指導教諭）」

1つ選択	19	41.3%
2つ選択	19	41.3%
3つ選択	8	<u>17.4%</u>
計	46	100.0%

Table 1 「昨年度担当した役割や業務のうち、いくつ回答したか」（指導教諭）

また、「学校計画研修（1年次）においての自校の課題、大変であると感じていること」を自由記述で回答を求めたところ、「研修時間の確保」12名（26.1%）、「研修及び準備の時間の確保」16名（34.8%）となっており、時間の調整や様々な業務の中で準備、研修を実施することが困難な状況にあることが分かる。

一方で、指導教諭に「初任段階教員に対し、教えたいこと」について自由記述で回答を求めると次のような回答が得られた。

- ・社会人として周囲に適宜相談したり、確認したりしながら業務を進めていくことや学校組織内の他職種との連携の在り方などについて知ってほしいし、教えねばと思います。
- ・方法だけでなく、生徒の困り感に寄り添うことの大切さやチームで取り組むことの大事さも伝えたいです。
- ・全ての教育活動及び業務は、子供のために行われているということ。
- ・教育公務員としての心構えと覚悟

【設問の回答について一部抜粋】

特別支援教育に関することや業務の進め方以外にも、組織の在り方、職場内の連携、仕事への姿勢等幅広く挙げられており、初任段階教員を育成することにおいては「育てなければならない」という強い使命感をもって取り組んでいることが分かる。

カ 学校計画研修（1年次）について（初任段階研修を担当している部署）

初任段階教員研修を担当している部署への設問2では、どのように学校計画研修を実施しているのか、主に研修の形式について選択式で回答を求めた。

指標に示す内容「学級経営」、「教科等指導」、「生徒指導・進路指導」の3つについて、それぞれ誰が、どのような形式で研修を実施しているのか、またその頻度について回答を求めた。

Figure 8 では「学校計画研修で指導助言を行う人」として、複数回答のうち、最も頻度が高い回答を抜粋してグラフにした。学校計画研修において、研修を多く担っているのが、「初任者が所属する学年や学級の教員」であることが分かる。

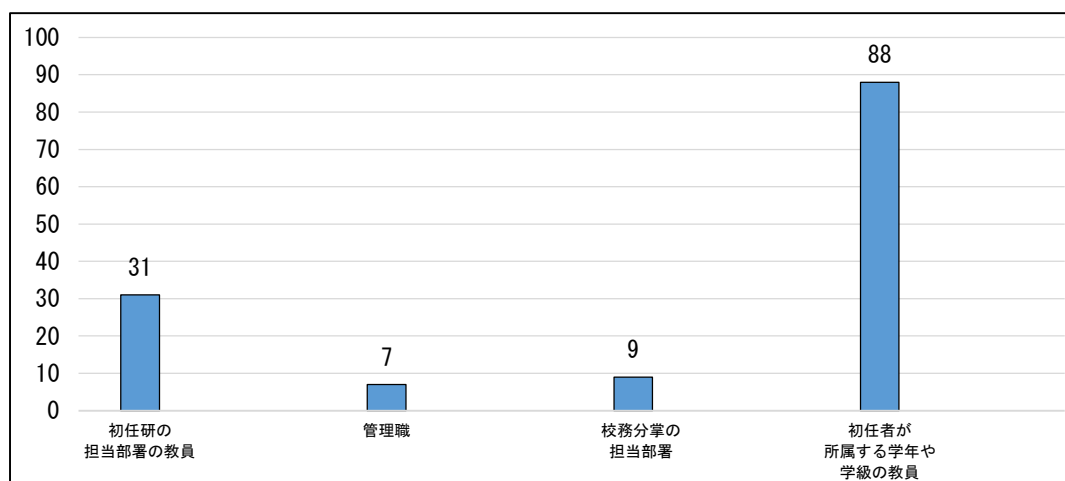


Figure 8 「学校計画研修で指導助言を行う人」（担当部署）※複数回答 ※アンケートの本設問では学校計画研修（1年次）を「初任研」、1年次教員を「初任者」と表記している。

Figure 9 では「学校計画研修の形式とその頻度」のうち、最も頻度が高い形式、次いで頻度が高い形式とその合計を表している。最も頻度が高いのは実務によるものであるが、次いで頻度の高いものの数字を合わせると、「協議（対話形式）」についてもかなり頻度が高いことが分かる。研修について、取り組みやすいのは日常の実務による指導であるが、学校においては協議による対話についても重点的に取り組まれていることが分かる。

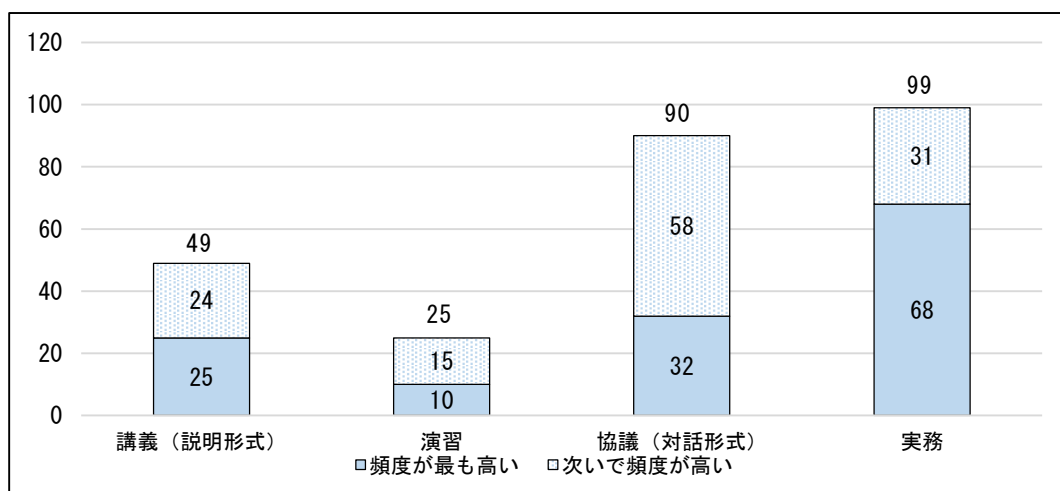


Figure 9 「学校計画研修の形式とその頻度」（担当部署）※複数回答

2 研究協力校との取組

(1) 研究協力校

- ・北海道美深高等養護学校（1 年次教員 2 名在籍）
- ・北海道室蘭養護学校（1 年次教員 5 名在籍）

(2) 取組の内容

ア プログラムの試行的実施（計 6 回）

遠隔形式又は学校訪問による研修を合計 6 回実施した。各研修時間において、特セン所員が説明や演習の進行を担当し、演習部分では初任段階教諭と指導教諭が対話や協議を行いながら実施した。

各研修は、研修資料（スライド）に基づいた講義が約 15 分、演習が約 10 分、演習後のまとめが約 10 分で構成されており、1 回の研修時間は約 40 分とした

イ 研修におけるニーズの聞き取り

各研究協力校に、初任段階教員研修（学校計画研修）の計画、取組状況、研修の充実に向けたプログラムの内容に関する意見や要望について情報収集した。

また、各研究協力校で実施した研修資料（スライド）を活用した研修について聞き取りで意見を求めると、次のような回答が得られた。

- ・研修時間は 30 分～50 分程度がよい。
- ・講義だけではなく、演習、対話を通して学ぶことができる。
- ・研修資料（スライド）があることで、研修の準備に係る負担が軽減される。
- ・研修資料（スライド）が提示されることで、研修内容が明確になる。
- ・研修資料（スライド）の内容や根拠となる資料から指導教諭の学びにもなる。
- ・研修資料（スライド）の説明に加え、提示した指導略案に沿った具体的な説明があるとよい。
- ・学んだことがこの後の実務につながるようになるとよい。

【研修資料（スライド）を使った研修について一部抜粋】

内容や効果について肯定的な意見を得る一方で、当初予定していた研修資料（スライド）の説明だけでは不十分であることや、研修後の実務や自主的な研修につながるための工夫が必要であることが明らかになった。

ウ 指導教諭及び 1 年次教員からの聞き取り

研修の実施前や実施後に、指導教諭と 1 年次教員のそれぞれから、研修内容に対する意見や研修を受けた率直な感想、自校における初任段階教員研修の体制等の工夫などについて、聞き取りを行い、次のような回答を得られた。

- ・初任段階教員との対話を通じた学びだけではなく、相談や連携がしやすい関係をつくることできた。
- ・研修したことを踏まえて初任段階教員同士が授業について検討するなど、対話する機会を設定することで、初任段階教員が具体的な改善点に気付くことができた。

【研修の効果について一部抜粋】

指導教諭からは、研修や日常的な対話が、相談や連携がしやすい関係づくりに有効であったことや、研修で初任段階教員同士が授業について検討する機会を設定することで、研修内容の理解を深めることができたことが挙げられた。

また、アンケートにおいて2年次教員が対話を通じて学んだことがよかったと回答していたことについて、指導教諭においても同様の実感があることが明らかになった。

1年次教員からは、研修の感想や教員としてのやりがいについて聞き取り、次のような回答を得られた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・授業の前の教材研究など、授業準備をしているときが楽しい。・どうすれば分かりやすく、伝わりやすい授業になるか考えることが楽しい。 |
|---|

【教員としてのやりがいについて一部抜粋】

当該教諭は、実際の研究授業において、単元の目標を学習指導要領の各教科の内容に基づいて設定し、本時の目標が育成を目指す資質・能力の3つの柱のいずれであるかを明確にして授業を実践するなど、研修で学んだことを実際の授業に具体的に生かしている成果が見られた。授業の目標の設定など、学ぶ内容を明確にした研修が、上記のような実感につながった要因の一つではないかと考える。

3 プログラム作成に向けたアンケートと研究協力校との取組における考察

(1) プログラムの示し方の検討

プログラムの内容や構成を検討するに当たり、アンケートの結果や研究協力校との取組を踏まえて考察した。

初任段階教員への設問3では知識、技能ともに最も重要と捉えている項目が教科等指導であることから、特に授業において指導する力を高めることにニーズがあることが分かる。また、設問2では、「1年後のなりたい姿」について5割以上が「イメージしている、まあまあしている」と回答しており、具体を記述式で求めた回答においても、個に応じた指導、授業づくり、児童生徒理解等、授業や指導に関する能力を伸ばしたいという割合が5割以上であった。

しかし、授業において指導する力を高めたいと考えてはいるものの、設問3では、授業の計画・準備、実践、評価・改善等に関わる「学習指導案の作成」、「各教科等における学習評価の進め方」、「授業の参観と分析」等の項目を重要とする割合が低くなっている。

このことから、初任段階教員は「授業ができるようになりたい」、「授業づくりを学びたい」と意欲をもっている一方で、どのようなことが課題なのか、どのようなスキルや能力を向上させることで授業づくりが適切に進められるようになるのかが具体になっていないことが推察される。

また、2年次教員への設問において、学校計画研修で取り組んでよかったこととして研究授業が最も多く挙げられているのは、実際に授業づくりに取り組むことで「何が身に付いたのか」、「何ができるようになったのか」を明確にするこ

とを通して、自身の授業づくりの能力について成長を実感できたからではないかと考える。

このことを踏まえ、プログラム作成においては初任段階教員が「何を学ぶのか」、「何ができるようになるか」が分かりやすくなるよう、学校計画研修の内容をより焦点化し、具体化して示す必要がある。

(2) プログラムの内容

プログラムの内容を検討するに当たり、アンケート結果の考察と研究協力校との取組に加え、学校計画研修の主な内容⁵を参考にした。

研究協力校からの聞き取りでは、学校計画研修の主な内容⁶を基に、プログラムに取り入れてもらいたい内容について、次のような意見が挙げられた。

- ・「個別の指導計画の作成と評価」について、書き方の説明はしているが、目標設定の仕方など、丁寧に研修できていないことがあるため、研修資料（スライド）があれば活用したい。
- ・「個別の教育支援計画の作成と評価」について、作成はしていても活用に至っていないことから、研修において理解を深めたい。
- ・「実態把握」について、ベテラン教員は経験から自分なりの観点で把握していることがあるため、客観的な理解が必要である。
- ・知的障がい特別支援学校においては、「自立活動」の視点が足りないと感じている。また、近年は発達障がいのある児童生徒の在籍が増えているため、障がい理解について幅広く研修したい。
- ・「障がいの特性や状態等の理解と対応」について、今年度から研修の内容に設定しているため、研修資料（スライド）があれば活用してみたい。
- ・「単元づくり」や「学習評価」について、研究授業前に研修を実施し、学習指導案の作成や授業の評価、改善につなげたい。
- ・「目標設定」について、学習指導案を作成するに当たり、しっかりと根拠を踏まえることが重要である。
- ・こちらが当たり前と捉えていることが、初任段階教員にとってはそうではないことが多いため、基本的なことを丁寧に指導する必要がある。

※「」内は「学校計画研修の主な内容」を基に示した研修の内容例

これらの意見を踏まえ、プログラムでは学校計画研修の主な内容と関連させながら研修資料（スライド）の内容を設定した。前述のとおり、初任段階教員が「何を学ぶのか」、「何ができるようになるか」が分かりやすくなるよう焦点化、具体化して示したものがTable 3である。

⁵ （北海道教育委員会 2022. 3）「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」別紙

⁶ 同上

別紙

令和5年度（2023年度）初任段階教員研修（学校計画研修・特別支援学校）の主な内容

学校経営	学級経営	教科等指導	地域との連携	生徒指導・進路指導
○学校の教育目標の具現化 <u>○学校の組織と運営</u> ○職員会議への対応 ○教育課程の編成・実施、評価、改善 ○校内研修の進め方 ○日常の安全管理 ○センター的機能の発揮 <u>○重複障がい学級の指導の進め方</u> ○訪問教育の進め方 ○学校の実施とその結果の公表及び活用 <u>○寄宿舎の指導</u> ○食育の全体計画と指導計画 ○教職員の服務 ○学校における会計事務 ○学校における働き方改革 ○部活動指導	○学級経営の内容 ○学級経営と学年経営 ○部会、学年会への対応 ○学級経営案の作成と活用 <u>○個別の指導計画の作成と活用</u> <u>○個別の指導計画の評価</u> ○学級事務の進め方 ○教室環境の整備 ○学級経営の評価と改善 ○通知表の作成 ○指導要録、諸帳簿の作成、整理 <u>○学級懇談の進め方</u> <u>○家庭連絡帳の活用</u> <u>○家庭訪問の進め方</u> <u>○学級通信の作成</u> <u>○寄宿舎との連携</u> ○学校給食に関する指導 ○学級の危機管理 ○災害発生時の安全確保	○基本的な指導技術（発問、指示、ノート指導、板書、机間指導等） ○授業の参観と分析 ○学習指導案の作成 ○教材研究の進め方 ○教材・教具の活用 ○学習形態の工夫 ○各教科等の指導計画の作成と活用（全体計画、年間指導計画等） ○各教科等の指導の実践 ○各教科等の評価の進め方 ○個の応じた指導の進め方 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（ICTの効果的な活用を含む） ○カリキュラム・マネジメントの考え方 ○交流及び共同学習の進め方 ○学校図書館の利活用 ○保健・安全指導	○地域の方への接遇やマネー <u>○保護者との連携の進め方</u> ○就学指導の進め方 ○地域教育課題 <u>○PTAの組織と運営</u> ○訪問教育の進め方 ○教育行政の実践 ○地域資源の研究・活用	<u>○生徒指導の意義</u> <u>○児童生徒理解の方法</u> <u>○集団指導と個別指導</u> ○就学指導の進め方 ○教育相談の進め方 ○事例研究の進め方 ○諸検査等資料活用上の留意点 <u>○児童生徒の発達の把握</u> ○いじめの問題対応 ○不登校児童生徒への対応 ○生徒指導上の諸問題への対応 ○組織的な生徒指導の在り方 ○社会的スキルを身に付けるための活動の実践 ○キャリア教育の進め方 ○生徒指導の反省 ○指導記録の整理

Table 2 「（北海道教育委員会2022. 3）初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項 別紙」

【セクションⅠ】基礎基本の理解度アップ				
I—1	障がいの理解 ～「障がい」を環境から捉える～	25分	（説明10分 演習15分）	P 6
I—2	知的障がいの特性と基本的な対応	35分	（説明15分 演習20分）	P 8
I—3	実態把握～知的障がい～	30分	（説明10分 演習20分）	P 10
I—4	自立活動の指導の基本～知的障がい～	40分	（説明20分 演習20分）	P 12
I—5	個別の指導計画	25分	（説明10分 演習15分）	P 14
I—6	個別的教育支援計画	25分	（説明10分 演習20分）	P 16
I—7	教員間の連携	30分	（説明15分 演習15分）	P 18
I—8	保護者への対応	35分	（説明15分 演習20分）	P 20

Table 3 「『特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）』プログラムの内容【セクションⅠ】基礎基本の理解度アップ」

学校計画研修の主な内容の中から、セクションⅠの内容を精選した。その際の視点として、障がい理解や実態把握、個別の指導計画や個別的教育支援計画等、基礎基本について学び、その後の実務において理解が深まるような内容を取り上げることで、研修と実務での学びの一体化を目指した。この視点は、「学んだことがこの後の実務につながるようになる」という研究協力校からの聞き取りを参考にしている。Table 2 下線で示しているのはセクションⅠの8つの研修資

料（スライド）と関連しており、「学校経営」、「学級経営」、「地域との連携」、「生徒指導・進路指導」の各内容を取り扱うようになっている。

また、「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」では、「授業研究を中心に、参観、演習、協議のほか、実践に関する指導、助言、示範等を行い、内容や方法を含め全体の調和がとれたものにする。」⁷と示されており、授業力に関しては、教育に関する観点からのキーとなる資質能力の要であることから、プログラムでは特別支援教育における授業力を高めるための研修の充実を図る必要がある。

さらに、Figure 4「身に付けることが特に重要と思う技能」で示したとおり、1年次教員、2年次教員、指導教諭いずれにおいても身に付けることが特に重要であると思う技能が「教科等指導」に関する内容を多く選択している⁸ことや、研究協力校からの聞き取りから、研修では授業における指導力を高めることが求められている。

これらのことから、Table 2 枠囲みの「教科等指導」と関連させ、セクションⅡの内容を次のように設定した。

【セクションⅡ】授業力レベルアップ				
Ⅱ—1	授業づくりの基本 ～1単位時間の授業の目標の明確化～	30分	説明10分 演習20分	P 22
Ⅱ—2	単元の指導計画	30分	説明15分 演習15分	P 24
Ⅱ—3	学習評価～評価規準の作成～	30分	説明20分 演習10分	P 26
Ⅱ—4	学習指導案の作成	35分	説明15分 演習20分	P 28
Ⅱ—5	主体的・対話的で深い学び	30分	説明15分 演習15分	P 30
Ⅱ—6	個別最適な学びと協働的な学び	40分	説明15分 演習25分	P 32

Table 4 『『特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）』プログラムの内容
【セクションⅡ】授業力レベルアップ』

この6つの研修資料（スライド）については、学校計画研修における「教科等指導」の中から、研究授業や日常の授業の検討が十分できるよう、講義、演習として知識を定着させることが重要であると検討した項目（下線部）と関連させ、内容を焦点化した。

⁷ （北海道教育委員会 2022. 3）「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」

⁸ Figure 4「身に付けることが特に重要と思う技能」

教科等指導
○ 基本的な指導技術（発問、指示、ノート指導、板書、机間指導等） ○ 授業の参観と分析 ○ <u>学習指導案の作成</u> ○ 教材研究の進め方 ○ 教材・教具の活用 ○ 学習形態の工夫 ○ <u>各教科等の指導計画の作成と活用（全体計画、年間指導計画等）</u> ○ <u>各教科等の指導の実際</u> ○ <u>各教科等の評価の進め方</u> ○ 個の応じた指導の進め方 ○ <u>主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（ＩＣＴの効果的な活用を含む）</u> ○ カリキュラム・マネジメントの考え方 ○ 交流及び共同学習の進め方 ○ 学校図書館の利活用 ○ 保健・安全指導

Table 5 「初任段階教員研修（学校計画研修）実施要項」別紙 「教科等指導」から

なお、[セクションⅠ]と[セクションⅡ]については、内容のまとまりで分けていることから、各学校において研修を実施する際は順番にこだわらず、年間の研修計画に照らして必要な内容を選択することで、研修の効果が期待できると考える。

(3) 指導教諭が活用しやすい研修資料（スライド）の工夫

プログラムは、実際に各学校が研修を推進する中で活用することを目的に作成しているため、初任段階教員だけではなく、研修を実施する指導教諭が活用しやすくなるためにはどのような工夫が必要であるか考察した。

指導教諭への設問1において、指導教諭の複数兼務や業務の多忙化、研修時間の調整等研修の実施に係る課題が明らかになった。アンケートでは初任段階教員研修を担当している部署への設問2から、実際の指導形式は主に実務に基づいており、頻度においても「初任者が所属する学年や学級の教員」が圧倒的に多いことも明らかになった。また、研究協力校からの意見では、研修時間が短い方が好ましいこと、指導教諭が業務に費やす時間を軽減できることが望ましいことが挙げられた。

このことから、研修資料（スライド）を作成することで指導教諭の準備に係る負担を軽減することが考えられるが、事前準備を用意するだけでは研修の効果や質の向上にはつながりにくいことが予想される。

研修の効果や質を向上させるためには、指導教諭による研修の実施において、研修資料（スライド）の整理や研修の進め方の参考資料の整備が重要であると考

える。1時間の研修においては、その目的や流れを明確に示すことなどにより、指導教諭は容易に実施可能な研修の資料とプログラムを把握し、研修の質や効果を高めることが期待できる。

(4) 研修の効果を高める方法の工夫

初任段階の教員にとって研修が分かりやすくなる方法と、研修の効果を高める方法について考察した。

初任段階教員への設問2「特別支援学校教員として、目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていること」において、「実務を通して学ぶ」、「先輩教員を見て学ぶ」、「先輩教員からアドバイスをもらう」、「周囲とのコミュニケーション」等実際のやり取りや実務など直接的、実際的な関わりの中で学ぼうと考える意見について答えたのは、1年次教員41名（60.3%）⁹で2年次教員は23名（39.0%）¹⁰であった。

また、2年次教員への設問4では、自由記述で「学校計画研修（1年次）で取り組んでよかったこと」について尋ねた。回答の中で最も多かったのは「研究授業」で、21名（29.6%）がこの項目を選んでいるが、「周囲との意見交流」や「先輩教員との対話」等意見交流や対話がよかったという意見をまとめると、18名が肯定的な回答をしており、全体の25.4%に上る。¹¹こちらでも、実際のやり取りや実務など直接的で実際的な関わりの中での学びについて効果があったという意見が得られた。

このようにアンケートの結果から、初任段階の教員は、実務や実際の経験を通じて学ぶことで、手応えや成果を実感していることが明らかになった。また、研究協力校における研修や聞き取りにおいても、対話を通じた学びが効果的であると評価されている。このような背景から、研修プログラムにおいて初任段階の教員同士や指導教諭との対話を重視することで、研修の効果を高めることができると考えられる。

一方で、研修時間の確保や調整、指導教諭が多忙な業務の中で準備や研修を実施することが難しい状況を考慮すると、研修時間を増やすことは実効性に乏しいと言える。対話を目的とするのではなく、学びを深めることを目的に研修効果を高めるための方法として対話を行い、何を学ぶのかという内容を精選してプログラムに位置付ける必要がある。

⁹ Figure 2「特別支援学校教員として、目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていること（1年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

¹⁰ Figure 3「特別支援学校教員として、目指す姿に向けてどのようなことに取り組むか考えていること（2年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

¹¹ Figure 6「学校計画研修（1年次）で取り組んでよかったこと（2年次教員）」についての回答の内訳※上位5項目

4 プログラムの作成及び活用に向け重視すべきポイント

アンケート調査と研究協力校との取組の考察を受け、プログラム作成及び活用に向けた重点をまとめた。

(1) 初任段階教員の学びの実感に向けた内容の焦点化

初任段階教員は、授業に関する意欲的であり、「授業が上手くできるようになりたい」「授業づくりを学びたい」という目標を抱いている。研修プログラムにおいて学ぶ内容や習得する能力を明確にし、参加者が自己の成長や変容を実感できるようにするためには、研修の内容を具体的かつ焦点化する必要がある。

プログラムの作成においては、特別支援学校教員として必要な基本的なスキル、知識、技能を提供するだけでなく、教職の魅力や仕事のやりがいについての理解を深める研修資料（スライド）を含めることが大切である。初任段階教員が成長を実感し、自己有用感を感じられるようなプログラムを目指す必要がある。

このことから、単に特別支援教育の内容を網羅するのではなく、初任段階の教員が自らの理解を深め、気づきを促し、今後の学びにつなげることができるような研修内容を整理し、明確なねらいを示すよう内容の焦点化を図る。

(2) 指導教諭への分かりやすさ、負担軽減に向けた活用への工夫

指導教諭の負担軽減においては、研修内容の整理だけでなく、研修の準備や実施を効率化し、内容の充実を図ることが重要である。初任段階の教員からは、基本的な内容だけでなく、授業づくりや生徒との関わり方など、実務での経験や工夫について学びたいとの要望があった。そのため、研修では指導教諭が自らの経験や学校の取組を取り入れることができるようにし、説明を分かりやすくする必要がある。このような観点から、研修の内容や進め方の参考となる資料を整理し、指導教諭の準備を効率化し、経験や取組を加えやすい研修資料（スライド）とすることが重要であると考えた。

(3) 対話を取り入れる

対話による研修は、実務や研究授業の準備、又は日常のやり取りにおいて頻繁に行われている。アンケートの結果や初任段階教員、指導教諭の実感から、対話は有効な手法であることが分かった。そこで、プログラムでは対話による演習を設定することにした。これまで自然発生的な対話の中で得られた学びを、研修において明確なねらいを持たせることで、より効果的な研修になると考えた。

5 「特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）」について

アンケート調査及び研究協力校との取組における考察、プログラム作成の重点を踏まえて「特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）」を作成した。本プログラムは、「プログラムの内容」、「プログラムの特徴と活用の仕方」、「研修資料の解説」からなるものと、実際の研修で指導教諭が活用する「研修資料」の2つから構成している。

(1) 「プログラムの内容」、「プログラムの特徴と活用の仕方」、「研修資料の解説」

前半部分については、研修の内容だけでなく、研修資料（スライド）を活用して実施する際の目的やねらい、初任段階教員に身に付けたい力、研修の実際の進め方等を詳しく示すようにした。各項目の具体については次のとおりである。

ア 「プログラムの内容」

プログラムの内容は、前述のとおり「[セクションⅠ] 基礎基本の理解度アップ」と「[セクションⅡ] 授業力レベルアップ」に分けて示している。

プログラムの内容

〔セクションⅠ〕基礎基本の理解度アップ			〔セクションⅡ〕授業力レベルアップ		
I-1	障がいの理解	P 6	II-1	授業づくりの基本	P 22
I-2	知的障がいの特性と基本的な対応	P 8	II-2	単元の指導計画	P 24
I-3	実態把握	P 10	II-3	学習評価	P 26
I-4	自立活動の指導の基本	P 12	II-4	学習指導案の作成	P 28
I-5	個別の指導計画	P 14	II-5	主体的・対話的で深い学び	P 30
I-6	個別の教育支援計画	P 16	II-6	個別最適な学びと協働的な学び	P 32
I-7	教員間の連携	P 18			
I-8	保護者への対応	P 20			

Figure 10「特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）『1 プログラムの内容』」

イ 「プログラムの特徴と活用の仕方」

プログラムの特徴、構成を示すことで、実際に研修を行う指導教諭がプログラムの使い方を理解できるようにした。また、考察で得られた研修効果を高めるための工夫を整理して示しており、研修の実施に当たってはそれを参考にしながら研修を工夫することが可能である。

次に示すのは「プログラムを活用した学校計画研修の例」である。



Figure 11「特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）『2 プログラムの特徴と活用の仕方』【プログラムを活用した学校計画研修の例】」

枠組みで示した部分は、本プログラムを活用した年間の研修計画の例である。この計画例の作成に当たっては、研究協力校や道内の特別支援学校から「令和5年度の特センの研究に係る情報提供の依頼」を受け、一般的な学校計画研修の日程例として示せるよう内容を構成した。

この例では、年度始めに基本的な内容について研修を行い、児童生徒との関わりなどの実務を通して理解を深め、2学期は研究授業に向けて授業力の向上に関わる研修を中心に実施するよう研修を推進するようにしている。

各学校においては、既に計画している年間の研修計画の中に計画的に「特別支援学校教員スタート・プログラム」の活用を位置付けることで、研修の質を向上させることが可能となる。なお、ここで示しているのは例であり、プログラム活用の順は特に示しておらず実施時期は目安である。学校の状況、課題、研修のねらい等に応じて柔軟に活用していただきたい。

ウ 「研修資料の解説」

この解説は指導教諭など、研修を実際に担当する教員が活用するためのものである。各研修資料（スライド）に付き、見開き2ページで解説を示している。

Ⅰ-1 障がいの理解 ～「障がい」を環境から捉える～	
実施時期	4～5月
時間の目安	25分（説明10分、演習15分）
説明・配付資料	パワーポイントスライド11枚 研修コンテンツは、こちら → 
研修動画	あり
研修の方法 （推奨する方法）	説明・演習の両方を指導教諭等が実施 説明は受講者自身で、演習は指導教諭等が実施 ○
研修の効果を高めるための工夫	★ 指導教諭等の自身の経験談や実践
学校で用意する資料等	個別の指導計画
【研修のねらい】	
・障がいによる学習上又は生活上の困難についてのICFや障がいの社会モデルに基づく捉え方を理解する。 ・担当する児童（生徒）の行動について、その背景にある個人因子や環境因子に目を向け分析する技能を身に付ける。	
【研修のポイント】	
○ ICFによる障がいの捉え方や障がいの社会モデルは、障がい理解において重要な考え方です。児童生徒の実態を的確に把握し、適切な指導や必要な支援を検討するためには、これらの考え方を理解するとともに、児童生徒の行動等の背景要因を分析できる技能を身に付けられるようにすることが大切です。 ○ 本研修では、氷山モデルを使い、行動の背景要因を分析する演習を設定しています。演習に当たっては、受講者が、すでに把握している実態を基に考えを深めたり、実際の指導や支援に生かしたりすることができるよう、個別の指導計画等を活用することが考えられます。 ○ また、演習は、実際の指導や支援に生かせるよう、考え方を理解し、分析する技能を身に付けることが目的ですので、受講者の考えを聞き出したり、演習シート上で一緒に整理したりするなど、受講者が思考を深められるようにすることが大切です。	
特別支援学校教員ハンドブック（新訂版） Ⅳ 指導に当たって大切なこと 6 行動の背景を理解して対応しよう 	
【主な内容】	
説明	 「障がいによる学習上又は生活上の困難」について、ICFの障がいの捉え方から、個人因子や環境因子等とのかわりなども踏まえて把握し、指導の方向性を検討する必要があることを説明します。
演習	 障がいの「社会モデル」の考え方や、障がいによる学習上又は生活上の困難について本人の立場に立って捉え、必要な支援の内容と一緒に考える経験や態度を身に付ける必要があることについて説明します。

Figure 12 「特別支援学校教員スタート・プログラム（試案）『3 研修資料の解説』」

枠組みでは、研修のための時間の確保や調整が難しいなどの学校の現状を踏まえ、短い時間で研修を行えるよう、内容を焦点化するとともに、初任段階教員が何を目指すのかが分かり、何について学んだのかを振り返ることができるよう研修のねらいを示した。

また、「活用のヒント」として、指導教諭に重点的に説明してほしい内容や初任段階教員にどのような視点で、考え対話してほしいかなど、研修の実施に当たって確認してほしいこと、演習の意図等を記載している。研修資料（スライド）によっては説明内容の根拠や参考となる資料も掲載しており、指導教諭が事前に確認したり、初任段階教員が研修の後でそれらの資料を基に学んだり実務に生かしたりすることができるようにした。

見開きの右側では、研修資料（スライド）の中から、内容の中心となるパワーポイントのスライドを3枚程度掲載するとともに、短い説明をつけて指導教諭が研修資料（スライド）のデータや説明原稿を全て見なくても、あらかじめ研修資料（スライド）の概要を把握できるよう、主な内容や研修の進め方を記載している。指導教諭の研修準備に係る時間を軽減しつつ、研修の質が保障されるよう、研修資料（スライド）の解説を作成した。

(2) 「研修資料」

(1)アで示したプログラムの内容Ⅰ－1からⅡ－6まで、14の研修資料（スライド）についてパワーポイントのデータで示し、スライドに説明原稿を付けたものである。

研修資料（スライド）については、指導教諭が学校の取組や教育課程を踏まえた説明や自身の経験を付け加えるなど、使いやすさ、利便性を考慮し、パワーポイントのデータでWeb上に配布することとした。学校独自の内容を取り入れたり、工夫を凝らしたりしながら、より学校にとって使いやすく改良することが可能となっている。